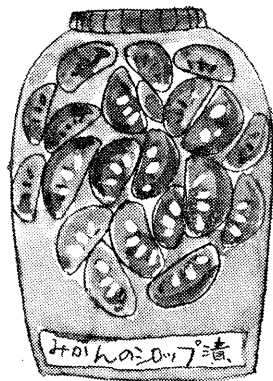


## 第十五回 儀式のあとで

### 堀内 守



定刻に集まる

A ねえ、Bさん。このところふしぎでならないのですがね。あなたはいろいろなことに興味をおもちだから、たぶん私の疑問にも答えてくださるんじゃないかと思っ、おたずねしますがね……。

B 何です。突然あらたまっ。知っていることなら何なりとお話し致しますよ。で、いったい、その疑問とというのは何なのですか。

A それがね。ちょっとストレートに言うと、あまりにもありふれているので笑われそうなのですが。毎朝子

どもたちが一カ所に集まりますね。それで、いったん集まったあとで、幼稚園に並んで歩いてきますね。所によつては、一カ所に集まって待っていると、迎えのバスがやってくる。それで乗り込みますね。

B ええ、よく見かける風景ですね。それがどうかしましたか。

A そのう——少しテレくさいのですが、どうしてあんなことをやるんでしょうね。それがわからないので、このところ頭が痛くて眠れない。よほど酔狂な人間だと思われそうですが、実は考えれば考えるほどわけがわか

らなくなりませう。

こんなことをおたずねすると、あなたはびっくりなさいますか。

B いいえ、どうして、どうして。あなたと同じような疑問を私もいただいているのですよ。ただ、口に出して言わないだけ。

いかにもあたりまえのことに見えますね。でも、いつ頃からああなったのか、考えてみることもありますよ。その場合、何かの本や参考書を調べてもあまりすっきりとした答えが得られるとは限りませんね。だから私などはいつも、当面の手がかりとして自分の幼なかつた時のことをできるだけ丹念に思い起こしてみるのですよ。

A で、何か手がかりが得られますか。

B もちろん、それほど明確ではないのですが、ただはつきりと思ひ出されるのは、そのあたりから時間が変わってあらわれたらしいということですね。

具体的に申しあげますと、こんなぐあいになりましたよ。

うか。それまでは一定時刻までに何をせよというような生活はあまりはつきりとあらわれなかった。幼稚園に行くようになってから、一定時刻までに一定の場所に集合しなければならぬということになった。

A それを一つの軸として生活が再編されたわけですね。一定時刻までに、一定の場所に集まらなければならぬ。それは起きてから支度をしてそこに集まるまでの時間ばかりでなく、夜寝るまでの時間をも方向づけるわけですね。

B そんなことはだいぶあとになってから整理した結果ですよ。初めての頃は何が何やらさっぱりわからぬ。ただ、気分はまったく晴れですね。ちゃんとよそ行きの服装を試してみんなが集まってくる。連れて行かれる親同士のあいさつ、待っている間に交わすおとなちのおしゃべり、噂話などは、まるで言語ゲームのようでした。

今日でもそうじゃありませんかね。ことばは実用的なやり方で使われているのじゃなくて、まるで遊びのよう

に使われている。

「いいお天気ですね」「ほんとに」

などというあいさつは、実用的な目的をもっているというよりも、たがいに交換する気分のようなものです。

したがって、そこには時ならぬ儀式が出現したようなものです。

A は？「儀式」ですって？

B 大げさに受けとらないでくださいよ。まずもって大事なことは、儀式が集団のコミュニケーションであり、儀式化されたメッセージは集団によって発信されるということにほかなりません。そこには集団の参加が不可欠です。個人は、そのための道具に過ぎないということになります。

A 急に定義風なことばづかいになりましたね。

B そうです。儀式の記号体系は、厳密に規約化されているのですよ。

## 統合力

A 最小限にしてください。むずかしく語るのはやめて、できるだけわかり易くたのみます。

B そうですね。じゃ、できるだけわかり易く語るところにしましょう。

あの平凡な場面にも儀式的な色彩は見られるのです。儀式が重んじられたのはしかるべき理由があつてのことです。

日本の学校は、家庭や地域社会の果たすべき役割を背負い込んで発足しました。出生や経験が多様な子どもたちを統合していくために儀式を重んじました。まず一体感を与えるのが目的だったのでね。

明治の中期には、その行事が規程としてまとめあげられました。例の「小学校祝日大祭日儀式規程」というあれですよ。

この中には儀式の最小限の規約が表現されています。よく見ると、それ以前に実際にやっていたものを文章化したもの、とも読めるし、また、多様な儀式があつたのをついに方向づけたともいえますね。

A ずい分昔の話が出ましたね。おまけに「小学校」のことですね。幼稚園とはあまり関係がないじゃありませんか。

B いや、さにあらずです。当時の「小学校」は、今日の小学校とは位置づけが違います。多くの人びとが小学校に進むのがやっと。そういう段階です。これが一つの理由。もうひとつは、当時の「小学校」は、子どもばかりでなく、地域社会の慣習を新たに組み替えていく役割までも課せられていた。こういうことをよくお考えください。いわばその地方の文化センターが「小学校」だった。

「だから、「儀式規程」は、他の分野にも波及していくことが期待されていたわけです。

A 何だが、まだピンと来ませんね。古い時代のオハナシとしてしかひびきません。もっと現代にひきつけて説明してくれませんか。

B そうですね。じゃ、こうしましょ。大勢で勝手にわいわいさわいしている子どもたちを静かにするよう指導

する。それにはどんな方法がありますか？

「ウルサイ！ 静カニシロ！」とどなるのも一つの方法です。威嚇ですね。でも、これだと持続しない。このとき儀式を用いるのです。しわぶきをしてはならない。おごそかな雰囲気を引き込む。

A まるで神なき時代の「神」の創設のごとき感じですね。

B だって、ばらばらだった人間たちを一本にまとめるのは儀式の特性じゃありませんか。校旗、校章、校歌などもこの一環なのですね。

### 朝礼

A 言われてみると、いくつか思い当たるところがありますね。たとえば朝礼。あれは明治以来レンメンと続いているのですね。あるときは「朝会」と呼ばれました。「朝の会」とやわらかく表現される場合もあった。

今日では、役所、会社、どこにおいても朝礼がありませんね。

B 小さな会社でもやっていますねえ。毎朝やるのだから、繰り返しで定形化している部分とその日の新しい情報交換をやる部分とから成っている。しかし、全体としては始源かきに還れというところにポイントがあります。

A 「朝」のシンボルがこんなに強調されるのはなぜでしょうね。「昼」だっていいじゃないかと思われるのですがね。

B 面白い質問です。たぶん「朝」を重視するのは稲作民族特有の宗教的感情に由来するのでしょうかね。「すがすがしい空気」「明るい日の出」「太陽崇拜」等々と結びついているのでしょうか。

と同時に、朝礼は号令と規律から成っていますね。「気をつけ」「前へならえ」「礼」というような号令で、全体が一斉に行動をする。沈黙、きびきびとした動き、注目等々です。

A 重点の置きどころは時代によって変わってきているのでしょうかね。

B もちろんそうですね。儀式面を重視するか、管理面

を重視するか、宗教面を重視するかによって、朝礼の雰囲気はずい分違ったものになりますね。

敬礼一つとっても、整列でも、あいさつでも、みなこの文脈によって意味が変わりますよ。ピンと緊張した雰囲気の中で「礼！」というきびしい号令が響き、それに做って一斉に「礼」をする。形式から見ると、まことにみごとで、整然としている。訓辞がなされ、宣言が唱和される。

他方にはもっと和らいだ形のものもある。これは、まづ身体リズムの緩ぎからはじまる。のびやかな音楽、笑顔、さわやかなあいさつの交歓。でも形の上では儀式の面を失なってはけませんね。

A あ、思い出しました。わたしなどはあの朝礼の際、いろいろな係りの先生がちよっとした注意をなさるのが記憶に残っていますね。清掃のこと、物を忘れるなという注意、落としものをみんなの前で示して、自分のものでないかどうか確かめようと指示されたことなどです。

B それは儀式の間に出現する日常の場面です。諸注意、情報交換。むずかしく言いますと、周知徹底事項。

A 朝礼における一連の行事を号令を手がかりにしてたどってみましょうか。典型的なパターンは、まず入場からはじまる。(1)学年学級順に体育館(または校庭)に集合、(2)集合整列、(3)一同礼、(4)校長訓話、(5)ラジオ体操、(6)諸注意、(7)整列順に退場等々でした。

B それが朝礼の規約なのです。たとえていえば文法です。

A なるほど。でも、これは明確に意図された規約でしょう。この会話のいちばんはじめに出た。一定時刻に一定の場所に集まるなどというときには、そういう厳密な文法などはないでしょうね。あくまでも任意なおしゃべりになるでしょうから。

### 集場合所の怪

B ところがそうではありません。一見すると、毎日毎日別々の話題が生まれているように見えます。しか

し、よくごらんになってみてください。定形的な骨組みが浮かびあがってくるから。

たとえば親同士が交わすあいさつ。それも「おはようございます」に始まり、「いいお天気ですね」とか、天気を話題にしたりすることが多いです。そのあたりは情報交換というよりも、たがいの機嫌の表現のしあいのようなものです。よく見ていると、そのあたりでも機嫌のよし悪しは判断できます。もちろん、それがわかったからといって、「おや、きょうはいささかごきげんがナナメですな」などとは言わない。言わないのが規約なのです。

もう少し仲良しになれば、それが話題になるかもしれない。しかし、大体は、そこまでは入り込まず、当たりさわりのない話題で時を過ごす。

A それじゃまるで綱渡りのようにバランスを取るのに似ていますね。

B そうです。毎日のことですが、そこで交わされるのは言語ゲームに似ています。ことばは、そこにおいて

道具じゃなく、まさに玩具に近づいていますね。

「あら、そのセーターいいわね」

「いいえ、これは古いものですよ。捨てるのももったいないから着てみたの」

こんな会話が交わされています。もしこれを劇の台詞と考えて、何通りも演じ分けてみてください。親しい者同士の会話として見えてきたり、憎しみ合っている者同士が皮肉とトゲのあることばで傷つけ合っているようにも見えてくる。

A そこまで拡大してみなくともいいじゃありませんか。

B 拡大してみると、あの場の会話が一定の文法に従って規約化されていることが見えてくるですよ。マンゼンと聞いたら消えてしまいそうな会話ですが、実は予想外に大枠はきまっています。何ならその大枠を示してみましようか。

最初に連れ立ってきた親子。

「まだだれもきていない。一番だったね」

「でも、すぐくるよ、みんな」

「あ、きた」

「おーい、おはよう」

これなどは黙っていても大して違わない会話です。しかし、ここで交わされているのは自分で自分に言いきかせているような内容です。自然とことばが発せられている。あたかも、その場にくると、その場が人間をして語らしめるように。

仲間がくる。すると、その姿を認めただけではおさまらない。かならず「きた」とかいつてことばにあらわす。こうして生まれることばはその場にあたかも磁場のように作用していく。だから相手も同じようなことばを口にする。

A なーるほどねえ。磁場とはね。

B だから、違った話題が交わされても、その形の方に目を向けてみれば定形なのです。シナリオがきまっている。アドリブの部分は思ったよりも少ないのです。

## 式次第

A それじゃまるで式次第がぎまわっているようなものじゃありませんか。

B そうですよ。「気をつけ!」とか「礼!」という号令をAさんがかけるか、わたしがかけるかという違いは声の高さや音声などで判別されましょう。しかし、それらを超えて共通するのがあります。

園児が同じような服装をして一定場所に集まってくる。親は親同士であいさつをする。子は子同士であいさつを交わす。そのとき、子どもの会話や動作を毎日観察してごらん下さい。何という似た構造をもっているかよくわかりますよ。

A そこにも「式次第」があるのですか。

B ええ。「間に合った」という安心感がまずあらわれる。ついで「みんなまだ揃わない」という放心。あたりを気にとられ、親から離れる。

こんなのが前奏ですね。

A へえー。そんなものですか。

B そのつぎあたりで自分の身をもて余すということをよくやる。からだをゆすってみたり、とびはねてみたり、手をぶらぶらさせてみたり。メロディを口ずさんでみたり。

バスが来る。すると、いっせいに視線をバスの方に向ける。乗り込むあいだ視線は席の方に釘づけになっている。

「行ってらっしゃい」という母親のことばに応ずる子どもは少ない。みんなもうバスの中の雰囲気に入り込んでしまっ、つきそいの先生の指示に従っている。園児になり切っているわけです。

A 子を送り出した親たちの方はそれからどうします。

B ゆっくりと帰りながら会話を楽しみます。声高になったり、ひそひそばなしになったりするが、そこににおける「式次第」はもう責任から解放されたという解放感で大いに和らいでいます。だから冗談も出ます。時ならぬ歓声を出して、はっと恥じらうというようなこともあ



りましてねえ。

A たとえていえば、主婦や職業人に変身する幕間のひとときの気易さがそこにあらわれるのでしょうかね。

B 立ちどまって、その場で買物物の相談がなされたり、子ども会の打ち合わせなどがなされることもあるようです。しかし、それはごくまれで、立ちどまっておしやべりする内容は、先ほど言った言語ゲームです。気楽で、気のおけない文脈でレクリエーションがなされるのですよ。

A 見かけはそうでしょうが、そのなかで世間の動きが読みとられているということもありましょね。

B 当然です。

よく考えると、これもほぼ同年齢の子どもがある者同士だという共通の絆の故なのでしょう。子どもがいなかったなら、こういう場にも、こういう「式次第」にも参加はできないでましょね。

A 子どもが媒介者になっている？

B 子どもが親同士をつないでいるのですよ。だから、

ら、子どもの成長にしたがって「式次第」や「シナリオ」の構造は変わっていきます。

小学生ともなれば、登校の際の集合場所は、さまざまなゲームや情報交換の場につくり替えられてしまう。流行の発信源がそこに出現する。わずかの時間に、そこには息抜きのドラマが出現する。ほんとにふしぎなくらいですよ。

反対のことを想像してごらん下さい。もし子どもたちが家から直接学校までひとりひとりばらばらな形で沈黙したまま通うというようなことを。異様で、こっけいで、不気味でましょね。

A 出勤するサラリーマンじゃあるまいし。

とはいっても、現代においては大抵の人がそうなるのだが、どこにも隠れた儀式が潜んでいるという視点で見ると、子どもの実存がふだんとは違って見えてくるようですよ。

(名古屋大学)